

【研究ノート】

セネガル共和国・セレール人のコスモロジーと死生観

The Cosmology and Thanatopsis of the Sereer-Noon People in Senegal

佐藤 敦

SATO Atsushi

要旨 文化人類学研究において、現地の人々と生活を共にすることで出くわす人生儀礼のひとつとして、葬儀がある。そして葬儀は人生における「通過儀礼」である。それは対象となる個人だけではなく、その個人が位置づけられている社会において一成員である以上、周辺の人々にも何らかの影響を及ぼし、儀礼の参加を促すことになる。

対象社会における死生観の研究は枚挙に暇がない。しかし近年アフリカ研究における死や葬儀が語られる機会が少ないように思える。理由の一つとして、アフリカは「開発援助のフィールド」の歴史が長かった。葬儀という伝統的儀礼は開発アプローチとは関係がない、むしろ開発の妨げになる「因習」として扱われてきたのである。

本論では筆者が2009年と2010年に実施した西アフリカ・セネガル共和国のセレール人(Sereer)村落でのフィールドワークによって得られた葬儀のデータや知見により、極大詳細に記述する。そのうえで、世界宗教の日常実践の中に埋め込まれた人生儀礼の役割とそれにかかわる人々のダイナミズムをあらわす。このことにより、調査者と対象者という関係にとどまらない、人間理解の姿勢の重要性を示すことを試みる。

第1章 本論の背景

文化人類学の研究を行うにあたり、必ずといってよいほど行うものには調査地におけるフィールドワークが挙げられる。現地の人々の生活に直接的に参加しながら、時には距離を置き、時にはオーバー・ラポールになりながらもある程度の長い期間にわたり関わっていく。その中で、調査に関係するインフォーマントあるいはその家族や血縁にあたる者が死亡することも珍しいことではないだろう。

筆者の場合、調査中にインフォーマントのひとりであるAから「親戚が死亡したので葬儀に行かねばならない。お前はセレールの文化を調べているのだから、一緒に来たらいい」と誘われ、セレール人の葬儀に立ち会うことになったのが最初のきっかけである。葬儀の観察の内容は後で詳細に述べるとして、驚いたのは墓地に遺体を埋葬する際、足元の土の至るところ、白いかけらが混じっていることだ。筆者はそれがすぐに人骨であることが分かった。現地では遺体を棺に入れて埋葬する、いわゆる土葬である。よって白骨化するまではそれなりの時間が経過しているはずである。そこで参列者のひとりに、なぜ人骨があるのかを尋ねた。すると「ここは墓場だからね」とそっけない返事が返ってきたが、すぐに「墓地の面積が限られているから古い墓地は掘り返して新しい棺を入れるんだ」と付け加えた。墓地全体の面積は1ヘクタールもないという。しかし拡張しようと思えばできるほど周辺には余裕がある。そこで筆者の印象に強く残ったのは、尋ねた相手の答えに対する直接的な疑問ではない。そう答えながらも足元の人骨を全く気にとめることなく、

粛々と埋葬が行われていたことである。彼らセレール人の死生観に対する関心をおぼえたのはこのような理由である。

第2章 死をめぐる考察

死をめぐり、どのような考察がなされてきたのであろうか。人類学分野ではしばしば引用されるのはファン＝ヘネップ（Van=Genep, A.）の通過儀礼の概念である。ファン＝ヘネップは、儀礼を体系的にとらえ、たとえば人生儀礼において分離、過渡、統合もしくは再統合・再加入といった3段階のプロセスをたどるとする「通過儀礼」の視点を提示している。またターナー（Turner, V.）は、それぞれの移行のプロセスにおいて生じる境界の状態を「リミナリティ（境界性）」と表現し、境界の時期にある人々は、曖昧で不確定な存在であることを示した。また境界の時期にある存在は、それまでの社会的属性をはぎとられ、白紙の状態（タブラ・ラサ）にある。彼らはまた、同士の間では序列や身分識別意識が消え、仲間意識と平等主義が共有される。こうして生じる未組織の仲間集団を、ターナーは「コムニタス」（Communitas）と名づけた。こうした概念は今日人類学における重要な論理的枠組みとして位置づけられることになる〔ターナー、1981（1974）：209〕。再びファン＝ヘネップに戻るが、彼は葬儀についても触れている。ファン＝ヘネップは、葬儀（邦訳では「葬（とむら）いの儀式」と訳されている）は、単なる分離儀礼にとらえるのではなく、死者を死者の世界に統合させる儀礼であると述べている〔ファン＝ヘネップ、2012（1909）：189〕。分離儀礼としての葬儀は、世俗との分離すなわち生前、故人と関係のあった人物らとの分離である。方や、遺族たちは故人から分離されることにより新たな地位を獲得してゆく。

この2人の論者が述べるに、葬送儀礼は通過儀礼の一形態であり、当事者である故人のみならず遺族もまたその儀礼の当事者となるのである。そして故人は死者の世界の成員として組み込まれるのであると述べている。

以上の通過儀礼の枠組みを参照しながら、セレール人の葬儀を見てみよう。

第3章 セレール人社会における死の位置づけ

セネガルにおけるセレール人の人口比は全体の3割に満たない。多くはティエス州（Region de Thiés）およびファティック州（Region de Fatick）に集中している。筆者が調査を行ったのはティエス州におけるセレール人村落である。人々は一つの村にイスラーム、カトリックともに混住しているが、居住範囲はそれぞれの信仰に合わせてまとまっている。

セネガル人の8割以上がイスラームを信仰しているといわれている。イスラームの信仰とエスニックグループとの関係は希薄であるが、カトリックを信仰している人々の多くはセレール人もしくはセネガル南部のジョラ人である。

礼拝に用いるモスクや教会は各村に建てられている。規模は小さいものの、日常的に人々が集う。イスラームのモスクは毎日の朝と夕方そして金曜日の午後、カトリックの教会は日曜日の午前中の礼拝で賑わう。葬儀では、こうした宗教的施設を用いるよりもむしろ生前暮らした屋敷地および居室が葬儀の場の中心となる。

セレール人社会における死や、葬儀という人生儀礼の特徴は、一見、世界宗教であるイスラームやカトリック（キリスト）の人々の信仰の歴史の積み重ねによって表立って見え

てこないように思える。集う人々が身に着ける衣装もイスラームであれば民族衣装のブーブーを纏い、数珠を指ではじく。カトリックならば民族衣装ではないにせよ十字架（ロザリオ）を首に下げ、祈りを捧げる。こうした姿は葬儀の場以外、日常的な場面でも見ることができる。しかし伝統的な儀礼はイスラームやカトリックといった世界宗教流入以前から行われてきた。長い世界宗教の方法¹⁾による儀礼の歴史の中で一見埋もれてしまったかのように見えるが、セレール人自身の文化による解釈で息づいているのである。

セレール人は祖霊信仰のエスニックグループである。先述の世界宗教は彼らの解釈の下、内在化した祖霊信仰を実践している²⁾。セレール人が信仰しているのは祖霊 *Roog Seen* あるいは *Koor* である³⁾。*Koor* は天空の神であり、降雨を司る。また万有のエネルギーの源でもある⁴⁾。

セレール人の世界観として Gravrand が示した図 1 を解説する。

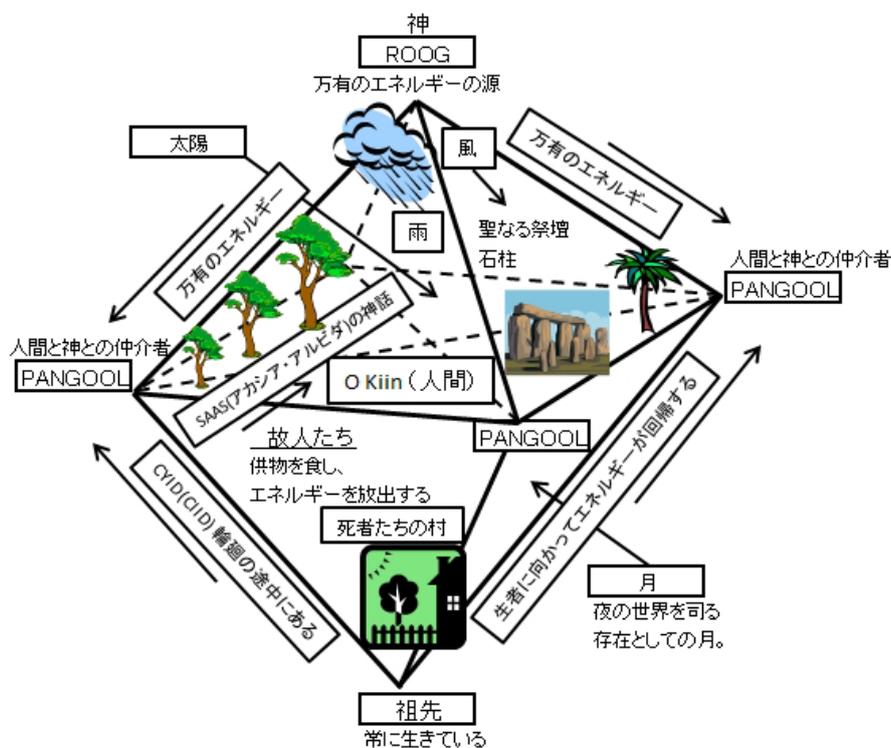


図 1 セレール人のコスモロジー

(Gravrand, H. *Pangool la civilization Sereer*, Les Nouvelles Editions Africaines du Senegal, 1990, p.216より抜粋、和訳と再構成)

1) イスラーム世界における死後の世界は天国 (*Jannah*) の存在がある。世俗的なものを生前に遠ざけてきたことにより得られる天上世界における場所とされている。またキリスト教においては天上界における祝福と幸せを得られる場所とされる。翻って、生前にこれらの宗教の經典に背く行為を行った者は、例外なく地獄へ行くとされている。

2) たとえばイスラームの断食明けの祭であるコリテ (*Korité*) は、セレール語、特にチャンギン語族のノーン (*Noon*) の人々において、神 (*Koor*) を語源とする。そもそもセレール人にとって男性の成人儀礼の日を指すものであった。また、イスラームの犠牲祭である *Tabaski* は、もともと古いセレールの狩猟の祭を源としている [Wade 1964:59-60]。

3) 本論では引用以外では *Koor* に統一する。

4) *Roog* および *Roog Seen* はセレール・シン語族、*Koor* はセレール・チャンギン語族の言葉であるがどちらもセレール人にとっての神を意味する。

不可視の世界においては、天上の神*Koog*（図1では*Roog*）の世界が存在する。*Koog*は雨や風を司る、いわば豊穡の神でもある。*Koog*は人間が生きる現生（地上）に万有のエネルギーを放出する。

昼間における地上の世界は、2つの世界に分けられる。1つは現実界である。現実界は人間が接触することができる世界であり、神聖な人々やもの、場所が混然一体としている世界である。もう1つは全能の力を妨げることのない想像界である。想像界は通常の間人が直接的に接触することができない世界であり、いわば不可視の世界である。

地上の世界には2通りの住人がいる。1つは人間である。可視的で村や郊外にコミュニティを作り、住んでいる。もう1つは*Djinn*、複数であれば*Cini*と呼ばれる精霊である⁵⁾。不可視で、人々から離れたところに住む。そして地上の世界の下には、夜の世界がある。祖霊の世界（「死者たちの村」と呼ばれる）*Jaaniiw*あるいは*Honolu*である。太陽の光はないが月が輝き、陸上の世界における夜を作り出す。そして*Jaaniiw*は死者が新たな生命を地上にもたらす、いわば新しい生命として輪廻転生するまで待機する空間でもある [Gravrand 1990:217-218]。

また*Pangoool*は天空の神*Koor*と祖霊との仲介役としての機能を果たす。*Pangoool*は2つの種類がある。ひとつは自然の力の化身としての存在であり、もうひとつは祖先の*Pangoool*である [Gravrand 1990:327]⁶⁾。

はたしてセレール人の生活において、こうした世界観は日常実践においてみられるのであろうか。

たとえば雨季において降雨を祈願する儀礼は、その成果の対価として*Koor*に対する供物を約束するものである。セレール人にとって清浄な土地において⁷⁾、持参した稗の種、少量の水を用いて擬似的に播種を再現し、さらに木の枝に短い紐を結び付け、供物である牛を表現する [佐藤 2012:90-91]。

また生者は、子孫に故人の名前を付けることで故人を想起する実践をおこなっている。たとえば、しばしば男性名で [Pape] という名を聞くことがあるが、これは [Pape] と名乗る者の生物学的祖父の名を継承しているからである。筆者のフィールドワークにおいて、Papeと名乗る男性の本名は、亡き祖父と同じであった。

これらの例はごく一部であるが、セレールの人々の生活実践に自身の世界観による規範が内面化していることがわかる。さて、次章では葬儀の実践について触れる。

第4章 葬儀の実践

本章では、筆者が2009年のフィールドワークにおいて経験したセレール人の葬儀について記述する。2009年は、ファンデー村共同体 (Communauté Rurale de Fandène) のほ

5) アラブ世界においてジンと呼ばれる精霊の存在はイスラーム登場以前から知られている。善性と悪性があり、善性のものは社会的地位と幸運をもたらすが、悪性のものは死をもたらすことがある。

6) *Pangoool*は現実界に存在するものと、想像界に存在するものがある。現実界に存在しかつ高位のものは*Saltigui*と呼ばれ、葬送儀礼などにおいては神*Koor*と死者との間の仲介者としての機能を果たす。

7) 清浄な土地として*Cini*が存在する。2010年に筆者が行ったフィールドワークにおいて「そこに行く際に、人に行く先を尋ねられても正直に答えてはならない。またどこにあるのかを詳細に述べることは血縁関係にある者、同一クランにあるもの以外に伝えることは好ましくない」というデータが得られている。

ば北端に位置するジャイエ・ノーン村 (Ndiayène Noon) にて行われたもので、故人は1927年生まれの男性であった。なお、故人ならびにその親族はカトリックである。

(1) 葬儀

まずは、死者となる者は何をすべきか。そのひとつとして生前に葬儀費用を準備しておかなければならない。

葬儀にかかる費用は2010年現在、現地通貨の価格で30万から50万フランCFA⁸⁾。これは一般的な家庭での金額であり、地位の高い人物が死亡した際にはさらに費用がかかる。

但し、葬儀をする金銭も持ち合わせていない場合、埋葬のみを行うことができる。その際には埋葬料として20,000フランCFAを司祭に支払うことになる。

故人の周辺の人々の様子を見てみよう。

葬儀を執り行うのは、故人の近親者が中心となる。村落であれば血縁にある者あるいは同じ苗字集団の者が総出で葬儀の準備を行う。故人が家長であった場合、その生物学的長男が喪主となる。葬儀の際、しばしば長男は故人が所有していた帽子や農具を身に着けることがある。これは葬儀の日以降、彼が家長となることを人々に示すためである。

セネガルのカトリック信者の葬儀において「レミ」と呼ばれる厚手の綿布は欠かせないものである。幅は15センチ程度の帯状のもので、漂白されていない。

女性の多くはそれを腰に巻き、男性は首あるいは手首に巻く。女性でも手首に巻く者もいる。左右どちらの手首に巻くかは決まっていない。葬儀に参加する者、特に血縁にある、ないに関わらず「キョウダイ」、「オジ」、「オバ」⁹⁾はレミを持参し、身に着ける。

長い布は「ラバル」または「マリカン」と呼ばれ、長さ7メートルにおよぶ。ラバルは遺体に巻きつけるものである。その上から遺体には民族衣装であるブーブーや帽子を着せる。ブーブーは葬儀のために新調するのではなく、故人が所有していたものを着せる。

3～4本の針、白の糸、香水¹⁰⁾そしてチューライ (Thioulaye) を用意する¹¹⁾。セネガルでは室内での食事の後や、初夜を迎える新婚の部屋など、空間における時間的境界を設けるために「香り」を用いる。遺体にはシデム (*Cassia sieberiana*) の葉をつぶして全身に塗り、翌日まで置く。こうすることにより遺体の保存性を高めることができる。

病人が死亡したら、病院にて検死がなされる。死亡の診断がなされたらカトリックの場合は4日ないし5日後、イスラームであれば即日のうちに葬儀のために自宅に遺体が戻される。

遺体は故人の寝室のベッドに安置される。そして葬儀の参列者たちは部屋に列を成して入っていく。遺体との対面の順番は近親の親族、同じ村に住む男性、同じ村に住む女性や子どもたちの順である。女性たちは、遺体との対面ののち、部屋から出るころには嗚咽を漏らしながら、皆涙を流している。「嗚咽」というよりもむしろ、わめく状態にも見える。中には気を失う者もいる。中央アフリカでは葬儀に際し「泣き女」が葬儀を盛り上げるため“泣きわめく。これは故人やその血縁にあたる者ではない。葬儀という人生儀礼を演

8) 1フランCFAは約0.2円で計算。

9) セネガルなど多くのアフリカ諸国の民族において、拡大家族の構成員の呼称は血縁の有無を問わずキョウダイ、オジ、オバといった名称で語られる。

10) 2009年10月の調査では故人の体に [Kiki44] という商品名の香水が吹き付けられていた。インフォーマントの話では、故人の体に吹き付けられる香水の銘柄としては定番のものであるとのことである。

11) チューライ (Thioulaye) はセネガルにおいて用いられる香の一種である。香炉を用い、焚く。

出する職なのである¹²⁾。セネガルの場合こうした「泣き女」にあたる職業は知られていない。

葬儀に参列する者の服装は、破れは見当たらないものの、着古したTシャツにジーンズといった普段着の者、ブーブーと呼ばれる民族衣装を着た者、様々である。参集者が信仰する宗教もカトリック、イスラームは問わない。

故人が安置されている部屋の前には、ひょうたん（カラバス Calebasse）が数個置かれる。このカラバスは葬儀には欠かせないものである。

カラバスは、大きく丸いのが特徴である。中身をくりぬき、乾燥させたものを家事全般で使う。このカラバスが数個、遺体がある部屋の入り口付近に並べて置かれている（写真1）。



写真1 故人が置かれている生前の居室前には、ひょうたん（カラバス）の器が置かれている。上には頭に乗せるときの布の帯が2つつ置かれている。（筆者撮影）

遺体はやがて、葬儀が行われるために張られたテントの中まで引き出される（写真2）。

故人とその家族はカトリックであったので、キリスト教式の葬儀が行われる。葬儀の流れに関しては、ミサ曲と説教が交互におこなわれる。聖歌が歌われ、司祭が聖書からの一節を唱える、ということを繰り返す。（写真3）

¹²⁾ これは故人やその血縁にあたる者ではない。葬儀という人生儀礼を演出する職なのである。葬儀が終わるや否や知らぬ顔して親族から金銭を強請ることがある。



写真2 遺体は寝室から葬儀の祭壇に運ばれる。男性が首に巻いている布がレミである。(筆者撮影)



写真3 葬儀の風景。聖歌を合唱し、司祭による聖書の一節が唱えられる。(筆者撮影)

葬儀に関しては先述の通り、イスラーム信者であっても参列できる。また年長者になると葬儀に参列した経験も多数あることから讚美歌を斉唱できる者もいる。そして最後に棺

の周りには聖水が撒かれる。

葬儀に参列するのは男女ともに、である。ただし座席は分けられており、テントを挟んで向かい合わせとなる。

葬儀が終わると、参列者総出で埋葬場所に移動する。出棺の際に、個人が好きだった飲み物を棺の足元に撒く。かつてはパームワインであったようだが、今日的にはコーラやビールが注がれることが多い（写真4）。故人は既に「死者たちの村」*Jaaniw*に”住んでいる”ため、故人への供物としてこうした飲み物が捧げられる。



写真4 故人が好んで飲んでいたというコーラを棺の下に注ぐ。（筆者撮影）

カラバスを頭の上に乗せた女性たちが葬列の最前列になって歩く。

先頭は故人の長男の妻が、2番目は次男の妻が、3番目には三男の妻、もしくは第2夫人である。葬列は故人の家の門の前を必ず通過する¹³⁾。通過の際には、先頭のカラバスを落とし、踏みつけて壊す。先頭のカラバスにのみ小麦粉を水で溶いたものが入っている。ほかの2つには何も入っていない。先頭のカラバスを踏みつけて壊す理由は、中に入っているものを地面に染み込ませることで「元に戻らない」即ち「死」を意味し、生者との別れの決意を参列者に促すのだという（写真5）。踏みつけて割るカラバスは新しいものを用い、ほかのカラバスは古いものでもよい。

そのあと、上下に上げ下げし、棺桶の底面を地面に数回触れさせる。故人が男性なら4回、女性なら3回行われる。故人との別れを意味する¹⁴⁾（写真6）。

¹³⁾ 筆者が参列した葬儀は、テントを張った場所のすぐに故人の家があったため写真では葬儀を行った場所でこの動作をしたかのように見えるが、そうではない。

¹⁴⁾ しかしこの動作はカトリックの葬儀のみ行われるという。



写真5 カラバスは故人の家の門の前で壊される。(筆者撮影)



写真6 墓地に行く前に、出発の合図として棺桶を地面に数回触れさせる。
(筆者撮影)

この葬儀の流れは他のセレール人 (Serer-Saafi もしくは Saafen、Sereer-Ndut、Sereer-Lalah、Sereer-Palor など) のカトリックであればほぼ同じであるという。ただし、未婚の若者 (男女とも) が死亡した場合、上記のカラバスを用いる儀礼は行われない。

また、今回の葬儀では故人が持っていた狩猟用の銃による空砲が鳴らされた。空砲を鳴らしたのは故人の長男であった。

(2) 埋葬

埋葬は村はずれにあるカトリックの墓地で行う。

セネガルの場合、墓地はイスラームとカトリックとを分けてある。近接することはない。よって異教徒の墓に埋葬されることは間違ってもあってはならない。

墓地へ向かう。列の先頭は、カラバスを持った女性である。そして棺を持った男性の若者ら数人のあとを追いかけるように、大勢の者たちが列をなして墓地へ向かう。故人の「*Jaaniw*（「死者の村」）への旅」である [Gravrand 1990:264]

通常、生者は日常的に墓地に足を向けることはない。なぜなら、死者が生者に対して生命への渴望による嫉妬をするからである [Faye 1983:18]¹⁵⁾。よって、日常的に墓地に向かうことは死者の魂を揺さぶることになり、また生者である自己の死に対する防衛のためにも避けられるべきである。

葬列は墓地までの間に、3回ないし4回は停止する。そして棺の周りで踊る。死者と先達への敬意をこめて、手拍子を加えて棺の持ち手の周りをまわりながら、*mbaax a sombe, ndeefyo mbaax*（これがわれわれのしきたり、しきたりに従え）と歌いながら踊るのである [Faye 1983:25]。この墓地までの道のりが葬儀の中で最もにぎやか、かつ唯一笑い声や歓声が聞こえる時である。言うなれば葬儀のクライマックスなのである。

墓地に到着する。埋葬は、カトリックの方法によって行われる。棺を納める穴は既に掘られており、その穴を囲むように人々が集まる。



写真7 カトリックの墓地。周辺は低木やBaobab（正面の大木）に囲まれる。
（筆者撮影）

¹⁵⁾ Fayeの報告では、葬儀の前に魂を沈めるための儀礼を行うという [Faye 1983:18]。

最初に司祭による聖書の一節が唱えられ、讃美歌が斉唱される。そして、若者らによって棺を納める穴をさらに掘り下げられ、棺は地面の下に納められる。墓地の面積が限られているため、納められる場所は、かつて別の死者が埋葬されていた場所である（写真7）。



写真8 地面の下に棺を納める。足元には多数の細かい人骨が散らばっている。
(筆者撮影)

埋葬の中心は男性である。女性も埋葬に参加できるが、この後に催される食事の準備に総出で追われる。

埋葬が終わると食事となる。食事は牛を1頭屠って料理をし、参列者に振る舞われる。

最初はチェレと呼ばれるトウジンビエを炊いたものの上に、屠った牛の肉や臓物、キャッサバやニンジンなどを煮込んだものをかけて食べる。牛の肉は来客に振る舞われるが、頭部は故人の母系親族にのみ食べることが許される部位である。頭部を食すのは「その家の者は帰ってこない」（頭部を切り落とすことで死を意味する）すなわち故人の血縁にある者に、亡き者は現生に帰ってこないことを覚悟させるためであると説明される。チェレの後にはチェブジェンなどコメを使った食事が振る舞われる。

以上、筆者が経験したセレール人の葬儀の一連の様子である。

第5章 考察

さて、前章で述べた葬儀の様子から考察を加えていこう。

セレール人の世界観に照らし合わせると、葬儀そのものについて、生者と死者双方の解釈が必要になる。つまり *o kiin*（人間）と *Jaaniw*（死者たちの村）である。

まずは、埋葬直前の出棺前に行われる、故人が好んでいた飲み物（コーラやビールなど）を、なぜ棺桶の中に一緒に納めずに、地面に撒くのか。この問いは、最初に出棺の際

に行われた、棺桶の底面を地面に数回触れさせる行為の解釈から始めなければならない。この動作は男女によってその触れさせる回数の相違があり、その葬儀の空間を共有する人々にとっては、故人との別れを意味するのだ。しかし死者にとってはどうであろうか。セレール人の世界観から参照すると、地面を伝って染み込んだ飲み物（供物）はやがて死者たちの村 *Jaaniw* に到着する。カラバスに入っていた小麦粉を水で溶いたものも同様である。しかしそれらを死者に知らせる必要がある。よって、棺桶を数回地面に触れさせるよいことによって死者にとっては供物をささげられたという合図になるのである。

もうひとつは、墓地における散らばった白骨の意味である。現実的には墓地は土地の面積が限られており、拡張できるならばその必要があるだろう。しかしそれよりも、かつて死者が埋葬されていた地面を掘り返し、その場に新たな死者を埋葬することは、セレール人にとっては「普通」なのである。なぜなら、埋葬された死者の骨よりもむしろ、死者の輪廻転生に対する思いが重要であるからである。輪廻転生の過程すなわち *Ciid* を経て現生に新たな生命をもたらされることが、セレール人にとっての繁栄を約束するものである。そのために“よき”祖先 *Pangool* になることが重要なのである。

このように葬儀で行われる行為の一部を考察してみたが、現代のカトリックの葬儀においても彼らセレール人の世界観の一端を垣間見ることができるのである。

第6章 結 論

世界宗教の影響はセレール人にとって「普通の」ことであり、日常実践の中ではカトリック、イスラームともに神に祈り感謝をする。季節の節目では各々の宗教儀礼を行い、その準備のために日々の生活サイクルがあるようにも見受けられる。たとえばイスラームの儀礼のために羊や牛を飼育・肥育し、当然ながら日々の祈りはその時や回数、方法は実践され受け継がれている。

こうした世界宗教の影響はいわば文化介入のひとつとして交易や人的交流とともにセネガルの歴史に刻み込まれてきた。もちろんその過程において経路となった地域を含めて考えるなら、まさにグローバルなネットワークの構築は近代よりもずっと以前から行われてきたといえる。昨今のグローバリズムや情報ネットワークの強化により、伝統的な営みが消失あるいは希薄になりつつある現代においても、日常実践においては残存し、実践していることが多いのである。

調査を行っている最中、葬儀における行為の理由として、生者の視点から説明されることが多いことに気がついた。葬儀で出向いた村落はインフォーマント A が幼少の時期に過ごしたいわば「実家」にあたる村で、私は初めて出向いた村であった。もはや長老格の A は、なつかしい面々との再会を楽しみながらも、彼のペーターであった故人の死を悼んでいた。翻って筆者にとっては「縁がなかった」村¹⁶⁾であったので、“一般的な外国人”に向けた説明をされたのかもしれない。しかし、現実的にはセネガルの村落地域においてもこうしたセレール人の世界観を体系的に語れる人物を見つけることは非常に難しい。その原因として世界宗教の影響は否定できないが、この葬儀のようにセレール人の文化的解釈によって内面化した結果、その本質が語り継がれぬままになっているのではないだろうか。

¹⁶⁾ 正確には1993年からの2年間、筆者が青年海外協力隊員時代に村落巡回において来訪歴がある。

司祭 *Saltigui* によって天空の神 *Koor* と祖先 *Pangool* に対して儀礼を行っていたかつての葬儀の一連の流れを知る者もほとんどいない。長老の伝統的な知識は、本来ならば人々の間で継承されることが最も望ましい。しかし今日、それは学術的資料の中に納められ、それにアクセスできるわれわれ研究者にのみ与えられた「特権」と化している状況を憂うのである。

しかしそれはもしかすると杞憂に終わるかもしれない。なぜなら彼らは葬儀のために老若男女総出で村に帰ってくる。長老格の死を悼むことで、人々は悲しみに包まれる。しかしこういう機会こそが血縁にある者、あるいは同じ共同体にいる者が集う機会になるのである。そして、多くの人々に包まれながら葬儀の空間に身を置き、各々の役割を果たす。葬儀を経て、各々が新しい地位や身分を獲得してゆく。故人に代わり、新しい家長になった長男の心境は如何程ばかりであろうか。その様子を周囲も見ることにより、この家族の新しい家長の誕生を承認することになるのである。

そして何よりも故人にとってこれほど多くの人々に見守られながら死者たちの村 *Jaaniw* に向かい、*Pangool* として輪廻転生の時を待つことは幸せなことなのかもしれないのである。

参照文献目録

- 佐藤 敦 2012 『セネガル共和国・セレール人村落における文化と開発－日常実践と呪術、そして調査者の視点の変容－』、千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程 博士学位取得論文。
 ターナー, V 1981(1974) 『象徴と社会』、梶原景昭(訳)、紀伊國屋書店 文化人類学叢書。
 ファン＝ヘネップ, A 2012(1909) 『通過儀礼』、綾部恒雄・綾部裕子(訳) 岩波文庫 白219-1。
 Faye, Louis Diene 1983 *Mort et Naissance le monde sereer*, Les nouvelles editions africaines du Sénégal, Dakar.
 Gravrand, Henry 1990 *Pangool la civilization sereer*, Les nouvelles editions africaines du Sénégal, Dakar.
 Wade, Amadou 1964 Chronique du Walo Sénégalaise (1186-1855), *Bulletin de l'IFAN*, Série B, Vol.26, No.3/4, Institut Fondamental d'Afrique Noire, Université Cheikh Anta Diop.